

学会・研究集会

◆条里制研究会

1998年3月7～8日

「古代の都市計画と条里」のテーマで第14回の大会を開催した。研究報告では、羅城門の規模や京南辺条里の施工時期に関する新説が発表され、また、伊勢国府の方格地割や政庁構造の比較検討、難波京の条坊復元などについて論じられ、討議が行われた。また、条里や土地区画に関わる発掘調査例の報告として、香川県西打遺跡での中世における坪割と土地利用の実態、京都府椋ノ木遺跡における地割溝の移動の事例紹介、愛知県三ツ井遺跡の条里・島畑遺構とその形成過程についての考察、福岡県大ノ瀬下大坪遺跡での西海道沿いに造営された上毛郡衙の遺構、などの発表が行われた。大会参加者は約100名。なお、本会は、研究対象に古代都市をも加えることとし、名称を「条里制・古代都市研究会」と改めることになった。(山中敏史)

◆木簡学会

1997年12月6・7日

第19回研究会を平城宮跡資料館で開催した(参加者185名)。研究報告としては今泉隆雄(東北大学)「門制と木簡―木簡のライフサイクル」があり、物資の勘検の際に、角筆による刻線で数を記した木簡の存在が指摘された。その他以下のような、最近の木簡出土事例の報告があった。渡邊晃宏「1997年全国出土の木簡」、池田善文(山口県美東町教育委員会)「長登銅山跡出土木簡」、八木充(奈良産業大学)「長登銅山と古代木簡」、加古千恵子(兵庫県教育委員会)・平田博幸(同)・古尾谷知浩「山垣遺跡出土木簡の再検討」、田中靖(新潟県和島村教育委員会)「下ノ西遺跡の調査成果」。なお大会に合わせ『木簡研究』19号を発刊した(編集担当:山下信一郎)(館野和己)

●古代の稲倉と村落・郷里の支配

1998年3月12～13日

古代の稲倉遺構から稲の収穫・収納、租や出挙などのあり方を探ることを目的とした研究集会で、考古学・文献史学・建築史学の研究者83人が参加した。陸奥・常陸・近江・出雲・筑後国などにおける正倉や居宅倉庫などの事例報告や、正倉の管理・構造・租税収取、集落や豪族居宅の倉庫の実態についての研究報告、討議が行われた。正倉については、集落や豪族居宅の倉との差異、不動産認定の方式、空閑地の役割などが明らかにされた。また、集落や豪族居宅の倉庫をめぐっては、稲の主要な収納形態が穎稲であったという共通認識が得られたが、その収穫形態では根刈りか高刈りかで意見は分かれた。また、高床倉庫や屋の遺構認定における問題点が示されるとともに、穀稲と穎稲との収納物の差が建築構造との関わり、など研究の現状が整理され、今後の課題が明確にされた。

(山中敏史)

●都城制研究集会

1998年2月21～22日

第3回目は「古代都市の構造と展開」と題して、都城に関わる諸問題を取り上げ検討した。構成は以下の通り。
Ⅰ.都市の成立／1都城の成立と京戸(北村優季)。Ⅱ.都市構造の展開／1新益京の調査と問題(今尾文昭)／2四行八門制の始め(竹田政敬)／3大規模宅地とその類型(中井公)／4寝殿造りの成立(長宗繁一)。Ⅲ.都市の生態／1園池と都城(小野健吉)／2宅地の班給と売買(山下信一郎)／3宅地と鎮祭(上村和直)／4工人町の発達と中世都市(山田邦和)／5遷都後の都城(館野和己)Ⅳ.総合討議。

過去2回の研究会では、古代都城の変遷が藤原→平城→長岡→平安京という単なる時間的な継起関係にあるのではなく、諸京の間で動態的な変化があること、なかでも藤原・平城京と長岡・平安京との間により大きな飛躍があるとする検討結果が得られている。今回の研究会でも同様な報告があった。

この結論は、今後古代都城の歴史的変遷を再構成する上に欠かせない重要な視

点となろう。研究集会の報告集『古代都市の構造と展開』を同時に刊行しており詳細は同書に詳しい。

(金子裕之)

●古代の土器研究会

1997年11月22～23日

「7世紀の土器」をテーマに、第5回シンポジウムを開催した。今回は、古墳時代的な土器から歴史時代的な土器への器種の交替期という土器研究上で問題の大きい時期を扱ったこともあって、各方面の関心を呼び、多くの参加者を得た。シンポジウムでは、各地域の事例報告の後、実際の資料を見て検討を行い、活発な討議が行われた。その結果、畿内と周辺地域では器種の交替の時期や土器製作技法の変化の速度に差があることが改めて確認され、今後も慎重に検討を重ねていかなければならないことが明確となった。

(玉田芳英)

●長屋王家木簡検討会

1997年11月6日・1998年1月27日・3月24日

史料調査室では90年度以来、所外の研究者を含め長屋王家木簡・二条大路木簡の釈読と研究を行っているが、97年度は1度の釈読検討会と2度の研究会を開いた。研究会の報告は以下のとおり。97年11月6日:森公章(高知大学)「長屋王家木簡から見た田庄の経営」・山下信一郎「長屋王家木簡と食封制」、98年1月27日:金子裕之「長屋王家の造寺活動」・多田伊織(国際日本文化研究センター)「二条大路『論語』木簡と長屋王詩文木簡について」・渡邊晃宏「長屋王家木簡の削屑」。なお釈読検討会の成果を生かし、97年度は『平城宮発掘調査出土木簡概報』33を刊行した。特別研究としては97年度が最終年度となったので、今後これまでの研究会での報告をまとめた報告書を作成する計画である。

(館野和己)

●中国建築史研究会

97年度は、都市史関係の研究会を二度おこなった。発表者と演題は、以下のとおり。8月12日:宋鎮豪(中国社会科学院歴史研究所研究員)「中国史前城址、

2月6日：何耀華（雲南省社会科学院長）
「南詔京都陽苴 城考釈」。

（浅川滋男）

●埋蔵文化財写真技術研究会

1997年7月4～5日

第9回総会、研究会を平城宮跡資料館講堂に於いて下記のスケジュールで行った。

7月4日：総会；参加者109名（含委任状）／講演；参加者108名「カメラムーブメントの基礎知識」（東京工芸大学教授 加藤春生）。

7月5日：講演；参加者102名「デジタルフォトの現状（銀塩写真とデジタル）」（コメット（株） 玉内公一）／分科会；「銀塩写真のデジタル化とその利用法への対処について」（（株）プレゼンテック 柏倉良而）、「ライティングの基礎知識」（コメット（株） 玉内公一）。

最近のデジタル化に対応した講演を行えた事は、今後の情報化時代にふさわしいものと思える。（佃 幹雄）

●発掘された古代・中世のトイレ遺構 検討会（第3回）

1997年11月22日

発掘されたトイレ関連の遺構や遺物について、調査事例を討議した。また、建築史学や文献史学の立場からも古代・中世のトイレについて検討した。併せて小便容器の可能性について科学的な検討を加えた。（黒崎 直）

●官営工房研究会（第6回）

1997年12月13日

大橋泰夫氏（財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター）の報告「下野国分寺跡出土文字瓦と造瓦体制」は、地方の官営工房の事例の一つとして、下野国分寺の瓦を製作した工房の実態の解明を目指したものである。下野国分寺跡からは、多数の郡名を記した文字瓦が出土しており、国分寺所用瓦を郡単位で分担して製作していた状況を明らかにでき、造瓦工房の編成とその変遷を跡づけることができた。質疑・討論は主として造瓦体制の理解をめぐって行ったが、郡名を記すことの意義についても疑義が出された。出土資料をどのように工房の実態の解明に結びつけていくべきなのかは

課題として残った。官営工房研究会は事例研究を積み重ねて第6回を迎えた。今回初めて地方の官営工房を取り上げて議論したが、個別事例は数多くあり、それらを総合的に捉えていく必要を痛感した。官営工房とは何かという、本来の問いを念頭に置きつつ、少しずつ事例研究の総括を図っていきたいと考えている。

（渡邊晃宏）

●出土考古遺物の材質をめぐる諸問題

1998年2月10日

科学技術の進歩にともない、分析科学は急速な進展を見せている。これらの分析技術は、考古遺物に対しても適用されてきており、その結果、新たな考古学的な知見が得られるようになってきた。しかしながら、考古遺物は劣化による変質など、通常の方法分析とは異なる分析の困難さを有している。本研究では、様々な分析手法により得られる考古遺物の材質に関する考古学的情報の妥当性を検証することを目的としている。ガラス、金屈、陶磁器などの主として無機質遺物について行われている材質分析に関する従来および最新の研究成果を研究集会において公表するとともに、それら分析から得られる結果を考古学的に考察する際の問題点あるいは考古資料を対象とした分析の限界などについて検討を行う。

（肥塚隆保・高妻洋成・村上 隆）

●掘立柱建物はいつまで残ったか

1998年2月10日

民家建築史学と中世～近代考古学の立場から、掘立柱住居の存続下限について討論した。その結果、信州や東京都多摩地方、岩手県南部地方などの事例をみると、東日本においては、文化～文政（1804～1830）頃が掘立柱から礎石建ちへの変革期と考えられる。ただし、その要因については民家における貫の使用などとの問題とからみ、西日本における存続下限の考察とともに、今後の研究課題である。

（箱崎和久）

●古代律令国家の須恵器調貢制を

考える 1998年3月7日～8日

以下のような成果を得た。各都城の変

遷とともに須恵器の供給地も変化を遂げること。『延喜主計寮式』に規定の須恵器貢納制の実体は、平城京の時代の前半期の状況に一致すること。調納国の設定と各調納国の須恵器生産動向とは極めてパラレルな関係にあること等を確認した。（巽淳一郎）

●文化的景観研究会

1998年3月13日

文化的景観Cultural Landscapeについて国の内外で関心が高まっており、造園や農業政策の研究者の参加を得て研究集会を開催した。今回は第2回目で国内の事例研究から今後の保存上の課題などを探った。特に文化的景観は広域の地域に広がっているため、地域開発との調整の難しさや背景になる農業景観の保全の重要性を確認した。報告者と内容は次の通りである。加藤允彦（奈文研）「名所と名勝の成立」、桐井雅行（元吉野町）「古代人の吉野観」、西田正憲（環境庁京都御苑管理事務所）、藤本高志（奈良県農業試験場）「明日香における棚田の経済評価」。

（内田和伸）

●低湿地遺跡調査の現状と研究法

1998年3月14日

低湿地遺跡の調査法に関する研究会を開催した。研究会は、前半に遺跡の発掘例を、後半に分析例を集めるように計画した。参加者は約30名で小講堂が満席となり活発な議論が行われた。個々の発表では、的場輝佳・荻野麻理（奈良女子大学生生活環境学科）による「遺跡土壌に含まれる化学物質－リン分析を中心に－」の発表が注目される。それは平城宮東院地区の溝の土壌に含まれるリン、硫黄分などの発表が、注目を引く。それは、買上までは水田であった発掘区の表土近くにリン分が多く、溝の堆積土には逆にリン分が少ないという結果であった。それは表土近くのリン分の集積は農薬によるもので、溝の堆積土は、常に地下水の流れを受け、リン分が流れ去ってしまった可能性が高いという。また、築地基壇のニガリを検証するために、マグネシウム塩を調べたが、周辺の土壌に比べ特にマグネシウム塩が多いという結果は得られ

なかった。これも溝の埋土を地下水が動いているためにリン分が流出した可能性が高いと言うことである。遺跡に残る無機塩類の研究は、今後大きな可能性を秘めておりさまざまな条件での分析が必要とされる。

(松井 章)

●遺跡の建造物復元方法の研究

1998年3月23日

近年、発掘された建築遺構から建造物が復原される例が増えている。建造物復原は遺跡を理解する方法として有効な手段であるが、まだ、歴史が浅いこともあって、安易な復原や、意義・目的意識が明確でないものが少なくない。本研究は、建造物の遺跡の整備はどうあるべきかを、これまでの事例調査等をおこなうことによって、問題点を整理し、今後の復原整備事業のあり方をさぐるものである。本中真（文化庁）、江面継人（文化庁）、吉岡泰英（福井県教委）の諸氏にも研究に参加していただいた。本年度は3カ年計画の最終年次で、全国の遺跡における建造物復原の基本計画から復原実施までのプロセスの把握とそこに内在する問題点をさぐるとともに今後のあり方について検討した。研究集会においては、まず千葉県教委の宮本敬一主査から上総国分尼寺、福岡県教委の田中壽夫主査から鴻臚館の復原整備事業の報告をしていただき、そのあと現状の史跡内建造物復原の問題点と史跡地内建造物復原の今後のあり方について討論した。

(村田健一)

●戦国時代—安土桃山時代の庭園遺跡

1998年3月25日

昨年度に引き続き戦国時代の武将居館の庭園遺跡に関する研究会を開催した。本年度は、やや時代の下がる安土桃山時代の武将の庭園遺跡も含め、事例報告及び話題提供を受け、討論を行った。龍王山城（天理市）の庭園では戦闘用の山城の中にも枯山水の意匠を持ち込んだ点、また、池と築山で構成される吉川元春館の庭園では池底の平石敷や直線の護岸のなど独特の意匠を持つ点が注目される。さらに名護屋城上山里丸の露地は一直線に打った飛石が興味深い。

話題提供及び討論の中では、この時代

の武将居館等の庭園空間が儀礼行為との関係性の中で理解される必要のあること、茶道との関わりを考慮することなど、機能（使われ方）面からのアプローチが、発掘庭園の成果をよりいっそう有効な史料となしうとの意見を得た。

(小野健吉)

●書跡資料調査保存の現状と課題

(第2回)

1998年3月28日

(1) 書跡資料の管理・公開と調査/東京大学史料編纂所田島公助教授。田島氏が長く勤務していた官内庁書陵部における書跡資料の保存・公開と調査・研究の実状についての報告。資料を所蔵している機関の、その資料の公開とそれに対する体制や、また編纂業務などの調査目的で収集した資料調査成果の公開の問題など、今後考えねばならない課題が提起された。

(2) 近年の近世史料調査法の紹介/京都大学文学研究科藤井諒治教授。現在、国立史料館が行っている文書調査法と千葉県等で行われている現状記録型の調査法を紹介し、それをもとに史料調査概念図が提示され、調査主体の条件、所蔵者の条件、史料の条件など各種調査の条件によって調査は具体的にどうあるべきか、との考えを示された。

(3) 史料の保存科学的調査と保存/奈文研埋文センター高妻洋成主任研究官。書跡史料調査者がどうすべきか悩んでいる資料へのラベル貼付、料紙質質調査、固着文書の展開などの問題につき、保存科学の立場での見解が示された。

(緩村 宏)

●飛鳥時代における造瓦技術の変遷と

伝播—飛鳥時代の瓦づくり

1998年3月28日～29日

研究集会を開催し以下のような成果を得た。

(1) 軒丸瓦の製作技法については、飛鳥寺から奥山庵寺に至る変遷案を示し、各地の初現期の技法と対比した。技法変遷は概ね飛鳥と一致するが、飛鳥からの技術伝播だけでなく、別に半島から直接瓦づくりの技術が地方に伝播した可能性もでてきた。

(2) 飛鳥寺の創建には、「花組」と「星組」の二組の瓦工人在りたが、飛鳥では近い時期に、坂田寺・定林寺・檜隈寺などに別の瓦工人在りたことを瓦当文様や技法から明らかにした。

(3) 初期の丸・平瓦の製作技法については、叩きや模骨などを取り上げたが、詰めた議論は次回に委ねた。

(4) 北九州では、半島にも例がない特殊な瓦づくりが6世紀後半に始まったとの報告を受けた。これが玄関口的那津に用いられていたことに驚いた。

飛鳥諸寺をはじめ各地の瓦を展示し、実物を見ながらの議論は好評であり、成果も大きかった。参加人員は約90名であった。

(花谷 浩)

●遺跡地図情報システム研究会

1998年2月13日

奈良国立文化財研究所では、平城宮跡をはじめとする遺跡の調査研究を行っているが、各種の地図として表される情報を総合的に検討するために、効率的なシステムの開発を行っている。そこで昨年に引き続き遺跡地図情報システムについて研究会を開催し、下記の発表が行われた。

講演：確井照子（奈良大学地理学科）「考古学で利用可能なGIS技術」。

研究発表：平澤毅（奈良国立文化財研究所）「遺跡地図情報システム（奈文研版）について（2）」

新納泉（岡山大学文学部）「IDRISIを用いた空間考古学研究的現状」

宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所）「写真測量の今後」

阿部・大賀（ライカ株式会社）「文化財研究調査とデジタル写真測量システム」

(森本 晋)